

島原・天草一揆とポルトガル船の来航禁止

1637 年、島原藩主 松倉重政およびその息子勝家の苛政と飢饉をきっかけとして、島原・天草一揆が勃発しました。この一揆を率いたのは、かつてのキリシタン大名の旧家臣で禁教後に農民となっていたキリシタンの庄屋たちでした

島原の原城に立て籠もった一揆軍は 2 万人以上でした。幕府軍の兵は 12 万人で、オランダ船にも支援されていました。4 ヶ月間の戦いの末、一揆勢はほぼ全員が殺され鎮圧されました。この蜂起を当初からキリシタンの一揆と位置づけていた幕府は、以降、キリシタンの弾圧を一層強化しました。

1639 年、新たな宣教師が国内に潜入するのを防ぐため、幕府は全ポルトガル船の日本への入港を禁止し、ヨーロッパ人の中ではオランダ人のみと交易を行うことを決めました。1641 年には平戸から長崎の出島にオランダ商館を移動させました。以降、この日本の対外貿易政策は、禁教政策とともに 19 世紀後半までの 2 世紀以上にわたって継続することになります。

人別帳の作成

寺方門徒帳は、転宗を強いて寺の檀家とさせた住民を記帳したものです。最初の寺方門徒帳は、1616 年に長崎で作られたとされています。現存する最も古い戸籍帳簿は 1634 年のものです。その後、絵踏みを済ませた人には印を押すという宗教的な要素が戸籍帳簿に導入され、宗門改や寺請制度が定着していきました。

潜伏キリシタンの摘発

このような厳しい禁教下でも、多くの宣教師が日本潜入を試みました。しかし、宣教師たちは最終的に全員捕えられ、ほとんどが殉教しましたが、中には棄教するものもありました。1644 年、最後の宣教師小西マンショが殉教し、日本のキリシタンは彼らを教え導く宣教師が不在の状態に取り残されました。

1657 年、ほとんどのキリシタンが処刑されるか改宗させられていた中、大村藩内でキリシタンの存在が発覚しました。第 17 代長崎奉行 黒川与兵衛正直は、608 名を検挙し、そのうち 411 名を斬首しました。

図 1

《聖体秘蹟図指物》

（天草四郎陣中旗）1637 年

（天草市立天草キリシタン館）

図 2

《踏絵》一部

フィリップ・フランツ・バルタザール・フォン・シーボルト『日本』より 19 世紀

長崎歴史文化博物館蔵